

# リデル・ハートとリベラルな戦争観

ロンドン大学教授 ブライアン・ボンド  
(立川京一訳)

リデル・ハートは今世紀を代表する戦略家として国際的に認められている。思うに、リデル・ハートの存在は十九世紀にクラウゼビツツが圧倒的な影響力を誇っていたことに対する二十世紀なりの回答であり、また、解毒剤とも言えよう。

筆者は幸運にも晩年のリデル・ハートと知り得ることができた(リデル・ハートは一九七〇年一月死去)うえに、学者としてスタートするに際して、随分と助けて頂いた。しかしながら、軍事史家として、筆者はリデル・ハートが生涯を通じてなした主要な議論のすべてに賛成しているわけではない。むしろ、リデル・ハートの死後、彼に対する筆者の見方は一段と厳しくなっている。筆者はリデル・ハートをテーマにした初の研究書『リデル・ハート—その軍事思想研究—』(*Liddell Hart: A Study of His Military Thought*)を一九七七年に上梓(一九九一年再版)した。これはリデル・ハートに対する個人的な親愛の情や感謝の気持ちと彼の思想に対する批判との均衡をはかるという困難な作業であった。同書の刊行から二十年が過ぎた今日、筆者はリデル・ハートに対して辛辣にす

ぎたという批判と反対に筆者は甘すぎるという批判と双方が等しく聞かれることから、あの本はうまくバランスがとれていたのではないかと自信している。

長い目で見て、クラウゼビツツ同様、リデル・ハートに対しても、研究者が世代ごとにそれぞれの新しい視点を持つであろうし、また違った角度から「達人」の業績に光を当てることにならうことははつきりしている。拙著が世に問われて以後、リデル・ハートの生涯と業績について書いた本が三冊登場している。いずれも全ページ、もしくは大部分がリデル・ハートに関する記述で埋められている。筆者と違いリデル・ハートと個人的な接点を持たなかつたジョン・J・ミアシャイマー(John J. Mearsheimer)は『リデル・ハートと歴史の重み』(*Liddell Hart and the Weight of History*)で筆者以上に批判的な議論を展開している。ミアシャイマーはリデル・ハートについて、公に議論をするのが好きなわりには、言葉づかいがまわりくどいとか、これこれの問題でよりどころとするほどの信頼性はないとかといった指摘を行つてゐるが、ところどころ説得

力に欠けるきらいがあり、また、ミアシャイマーが「アメリカ人である」とが、リデル・ハートをイギリス的な文脈で理解するうえで、幾分なりとも障害となつたようである。一九九八年にはアレックス・ダンチエフ（Alex Danchiev）が待望久しい遺族公認の伝記『戦争の錬金術師』（*Alchemist of War*）を世に問うた。しかし、これはあまりにも期待外れであつた。明らかに、ダンチエフは必ずしも波瀾万丈とは言えないリデル・ハートの生涯に焦点をあてるべきか（未亡人が存命中であるなど、遺族にも気を使わねばならなかつた）、それとも、筆者を含め何人かの研究者がすでに長い年月をかけて詳細に吟味しつくしているリデル・ハートの著作や思想に焦点をあてるべきか迷つたのであらう。ダンチエフはとりわけ第一次世界大戦におけるリデル・ハートの体験などといつたいくつかの重要な部分で満足のいかない妥協をせざるを得なかつたため、もう少しきちんとした伝記が書かれるべきであるという念を識者に抱かせた。

二番目に取り上げるのが、本稿の議論と直接関係のあるアザー・ガット（Azar Gat）の『ファシストとリベラルな戦争観』（*Fascist and Liberal Visions of War*）である。同じく一九九八年に刊行された本書は紙幅の半分以上をリデル・ハートに割いている。ガットはリデル・ハートを軍事理論家として分析しているが、その見解はあまりに寛大であるように思える。しかし、同書の出来はすばらしく、独創性に富んでいるので、一読を勧めたい。ガットのオリジナルな業績として評価したいのは、リデル・ハートの経歴と著作を思想史という広い文脈の中に位置づけたこと

である。また、ガットの研究はリデル・ハートが特定の問題において正しかつたか間違つていたかとか、とりわけ、機甲化部隊の提唱者や電撃戦思想の「生みの親」としてどうであつたかといった前々からなされてゐる（リデル・ハート自身がけしかけていたと言えなくもないような）議論の延長線上にある。

一九二〇年代半ばに健康上の理由で陸軍を除隊してからその死に至るまで、リデル・ハートは学者という趣が、相当、濃かつたものの、本質的にはジャーナリストであつた。物を書いて金を稼がねばならなかつたことが、仕事の量と質を左右した。一九四〇年代に強く望んでいたオックスフォード大学教授のポストを得ていただとしたら、リデル・ハートの著作がどのようなものとなつていたかを考えるのはおもしろいが、想像にまかずほかない。とりあえずここでは、リデル・ハートは体系的な一貫性のある思想を抱いていたわけではなく、また、その思想が専門家の厳しい批判の対象にされたこともさほどなかつたといったあたりを指摘すれば充分であろう。こうしたところはクラウゼビツツとはなはだ異なる。クラウゼビツツはその代表作の基調となつてゐる思想でさえ、より精緻なものにしようとする努力を重ねた。実際、リデル・ハートは晩年の十年間、『第二次世界大戦史』（*History of the Second World War*）を書き上げるために、当時、発生していた防衛問題には関心を払おうとしなかつた。このことで筆者はリデル・ハートに質問を投げかけてみたことがあり、それはのちに活字にもなつた。この時、筆者は、たとえリデル・ハートに時間的な余裕があり、健康状態も優れていたとしても、『戦争論』

(Off War)のリベラル版を書く気にはならなかつたであろうとの印象を抱いた。にもかかわらず、ガットが巧みに表現したように、戦争と歴史に関するリデル・ハートの膨大、かつ、多彩な著作やメモの数々は、一貫した姿勢と信念と見解で貫かれていた。こうしたことから受け取れる全体的な印象を「哲学」とまでは言えないにしても、それを「リベラルな戦争観」と称したガットは絶対に正しい。リデル・ハート自身もガットのこの絶妙な表現をきっと気に入るであろう。

ガットはリデル・ハートのこうした揺るがざる信念にも似た「戦争観」と彼を取り巻く日常的な問題との関連性の解明に取り組んだ。哲学者が政治や経済の世界に足を踏み入れれば、緊張、矛盾、判断ミスなどが起ころうなものである。これまで述べてきたように、筆者としてはこうした歴史論争において、ガットほどにはリデル・ハートに好意的な態度を示す気にはならないが、リデル・ハートの「戦争観」はそれが対象としていた特定の問題を凌駕しているだけでなく、リデル・ハートが生きていた当時よりもむしろ今日、より大きな関心を集めていることをガットは巧みに述べているように思える。

筆者は第一次大戦での経験がリデル・ハートのその後の人生に決定的な影響を与えたと考える点ではガットと完全に立場を同じくする。一九一五年から翌年にかけて、リデル・ハートは西部戦線の様相をつぶさに觀察し、「恐怖」とはいかなるものであるかを認識しているが、彼を強く突き動かしたもののが死傷者の姿であつたとは思えない。たとえそうであつたとしても、戦場での死や負傷については一度も口にしていないし、

また、書こうともしていない。反対に、一九一六年には戦局が好転しつつあつたソンムの戦いについて、極めて愛国的で、ときに好戦的でさえあるかのような文章を残しているが、これが活字にならず、彼の後世の評判に傷をつけることとならなかつたのは幸いである。第一次大戦の影響への反応は、のちにふたつの大きな要素となつて現れたと筆者は考えます。第一に、使用人を雇い、子息をパブリック・スクールからオックスフォードやケンブリッジに進ませるという快適な暮らしをおくつていたヴィクトリア時代の中流階級が広く文化的、社会的に引き起こした反応をリデル・ハートも共有した。彼らは平和のうちに経済的進歩を遂げることに何の不思議も感じていなかつた。したがつて、こうした影響力のある人々がいやしくも戦争について思考をめぐらせば、戦争が栄光と危険に満ちているとわかつてはいても、まるでスポーツか何かのように、戦争を美化したり、あるいはロマンチックなものとして受けとめたりしたのである。多数の兵士たちが西部戦線で敵に包囲され塹壕から抜け出せなくなつた時の姿はたいへんな衝撃であった。それは機械を使つた非人間的な殺戮にすぎず、そこでは兵士ひとりひとりの勇猛心や情報などといったものはほとんど何の意味も持たない。物理的な破壊と人命の損失は規模を増し、政治的な目標に照らして、まったく引き合わなくなつた。とくに、イギリスのように大陸ヨーロッパに領土的野心をまったく持たない、現状に満足している国にとつてはなおさらである。

第二の要素は職業的なものである。第一次大戦終結後すぐ、リデル・ハートは若き陸軍改革者として頭角を現し、(一九一六年とは反対に、)

早速、イギリス陸軍指導部とその戦略や戦術を厳しく批判する態度を示した。一九二〇年代、三〇年代のかなり過激な論調を要約すれば、將軍連中は何も学んでいないので、ヨーロッパで新たな戦争が起これば、また同じようなひどい過ちをくり返すであろうとでもいうことになる。戦車の活用と機甲化部隊の創設を提唱して評価された軍事専門家と、総力戦志向の流れに背を向け、イギリスがかかわる戦争は限定的なものに抑え、高度な機動力を有する職業軍人部隊によつて戦われなければならず、かつ、非凡な才能を持つた指揮官によつて作戦指導がなされなければならぬと考える（決して平和主義者ではないが）リベラルな思想家と、どちらが本当の自分なのか思い悩むリデル・ハートの姿を垣間見ることができる。同時代人の中でリデル・ハートがもつとも理想的と考へた指揮官はT・E・ローレンスではなかつたかと言わへてゐる。しかし、たゞエリデル・ハートであつても、ローレンスがパレスチナで成し遂げた偉業と同じことをヨーロッパで起こつた戦争でも実行できるかどうかを証明するには困難であった。いづれにしても、リベラルな戦争観というのは砂漠の蜃気楼のごときものである。

一九三〇年代初めまでのリデル・ハートは歴史家としても、また、評論家としても、世界各国で評判が良かつた。また、すでに自らの戦略思想の大要を確立してゐた。「間接アプローチ戦略」はリデル・ハートのオリジナルではないが、第一次大戦時に西部戦線で見たような正面衝突がくり返されてはならないという思いから、この戦略を詳しく論じることになつた。また、リデル・ハートがより広い戦略的な見地から歴史に

照らして正しいと考えて提唱した「イギリス式戦争法」とは、一国家が海軍力、経済封鎖、小規模上陸作戦、同盟国への財政的支援などをもとに戦う方法であった。この戦法は本質的に、現状に満足している帝国が、直接、攻撃された場合にのみ、それに応じて戦う方法で、領域、期間、戦闘レベル、富と人命の損失などあらゆる面で戦争を限定的なものに抑えようとするのが目的である。

こうした穩健で防衛志向の戦略が（陸軍が作戦戦闘部隊でなく、帝国内に縮小されていた）イギリスで受けが良かつたのは驚くことではないが、リデル・ハートも国民も、第一次大戦後、時を置かずしてファシズム、とりわけナチス・ドイツの挑戦に立ち向かわなければならなくなつた。ガットはひじょうにうまい言い方を正在するが、リデル・ハートはこうした大陸からの脅威の高まりに対し、抑止と封じ込めという戦略を考案することで応じた。リデル・ハートはナチスが国民の自由を抑圧しているのを遺憾に思つてはいたものの、ヒトラーとその体制の内部にかなりの程度の害悪や破壊主義的な傾向を持つ虚無主義を積極的に認めるつもりはなかつた。また、当時、イギリス人の大半がそうであつたように、国の指導者たるもののが戦争の勃発を楽しみに待つてゐるなど想像もつかなかつた。一時的ではあるが、リデル・ハートも抑止の一手として戦略爆撃の発想を抱いたことがある。しかし、一九三〇年代には、特定の攻撃を抑止したり、あるいはそれに対抗したりするには、經濟封鎖や「集団的安全保障」の方が有効なのではないかという立場をとるようになつた。一九三八年のミュンヘン危機に至るまで、リデル・

ハートは「宥和主義者」ではなかつたものの、ドイツがラインラントに進駐し、スペイン戦争とミュンヘン危機を経てポーランドに対して宣戰布告するまでの間、イギリスが次々と直面した危機を解決する現実的で実行可能な方策をリデル・ハートが考案できなかつたとするミアシャイマーの厳しい批判（筆者のものはもう少し穏やかであつたが）を打ち砕くような事實をガットも発見していない。もちろん、ジャーナリストや政治評論家に戦略上のジレンマを解く鍵を見つける義務はないが、（リデル・ハートのような人物の場合）担当大臣に対して、直接、軍事理論を披瀝したり、助言を行つたり、あるいは、そうしたものを作成紙に載せたりしていれば、それが適確であつたかどうか、慎重に検討する必要があろう。

希望的観測をあまりにも安易に受け入れていた一九三〇年代後半のリデル・ハートに対するガットの見方は甘すぎるというのが筆者の意見である。リデル・ハートは当時のリベラルな理想主義者の御多分にもれず、ナチス・ドイツを抑止するか、もしくは封じ込めるには「集団的安全保障」が有効と考えていた。しかし、理論的に考えて、「集団的安全保障」を機能させるために最低限必要な三国はイギリス、フランス、ソ連ということになる。この三国はいづれも協力するのはやぶさかでなかつたが、関与や負担の方途を明確にしようとしたが、協力を得るのに必要な努力を怠つたため、懷疑的であつたり消極的であつたりする国々を説得できなかつた。公正に見ても、リデル・ハートはミュンヘン危機の際に冷たくあしらわれるまで、大使館を通じて高度な情報を得ており、その中

には、ソ連がナチス・ドイツを牽制するため、英仏との協力に魅力を感じているという情報もあつた。しかしながら、ソ連の出方や約束を実行する能力を信頼できたかどうかは、今日でもまだ議論の余地があろう。さらに厳しいことを言えば、リデル・ハートはイギリス陸軍の大陸派遣に強く反対することを通じて、イギリスは将来のいかなるヨーロッパ同盟に対しても限定的関与にとどめるという姿勢を政府がとるうえでかなりの影響を及ぼした。実際にリデル・ハートは、まずもってブリテン島を要塞のごとくし、大陸の戦禍が及ばないようにするという政府の方針を支持していた。

一九三九年、第二次世界大戦が勃発するとリデル・ハートの評判は急激に落ち込んだ。政府が対独宥和政策の失敗を認めて、それを放棄した後になつても、「宥和」を弁護したというのが人気急落の大きな原因であつた。ガットが言うには、リデル・ハートのとつた態度は長い目で見れば現実的、かつ、賢明であつた。ドイツがチエコスロバキアを併合し、ソ連と不可侵条約を結ぶというほとんど最悪の事態が訪れたのを見て、イギリスが「総力戦」に訴えてドイツを撃破しようとしても、所詮それは不可能であり、經濟を崩壊させ、植民地を失うことになると考へたのである。それゆえに、間接的に主として經濟面で圧力を掛けつつ、外交努力を続けることによつて、ヒトラーか、もしくは、いづれにしてもより御しやすいであろうその後継者との間で妥協的平和に漕ぎ着けるのが好ましいと論じたのである。

今でもこの考え方を支持する声を歴史家の間で聞くことがあるし、チエ

ンバレンが首相を辞任するまで、政府の立場もまったく似たようなものであった。しかし、国民の間で反ヒトラー感情が勢いを増し、軍事力を大々的に行使してもヒトラーを食い止めねばならないとの考えがチャーチル（一九四〇年、首相に就任）の口から聞かれるようになると、戦時下の高度に緊張した雰囲気の中では、リデル・ハートの主張は敗北主義同然の扱いを受けた。ガットはイギリスが孤軍奮闘していた時期（一九四〇年から四一年まで）を一種の「冷戦」としているが、これは問題を混乱させているように思える。「冷戦」という表現を使うと、一九四五年以後の「冷戦」と何か関連があるのではないかという気持ちを抱かせてしまう。それとはまったく反対に、一九四〇年、四一年と、イギリスは正真正銘、戦争の渦中にあり、しかも、敗北の瀬戸際まで追いつめられていた。イギリスは自国の利益を守り、アメリカの支援を得、そして敵側に損害を与えるために、限られた手段を総動員しなければならない状況にあった。戦後の冷戦期を言い表すにふさわしい不安定な平和を維持するための「恐怖の均衡」や大国に共通の利益という要素はまつたく存在しなかつた。重要なのは、リデル・ハートが戦争ができるだけ限定的にすべきと考えていた時に、チャーチルは反対に戦争を最大限、激烈にしようとしていた点である。

一九四〇年六月に早くもフランスが敗北すると、リデル・ハートの評判は一段と悪化した。リデル・ハートは近代戦では攻撃よりも防御の方が圧倒的に有利であるという見方に固執するほどどうしようもなく教条的と映つたのである。ガットが（例えば、フランスはもつと真剣に戦う

べきであったと述べているなど）リデル・ハートに先見の明があつたにちがいないと控えめに論じているあたりは正しいと思えるが、フランスの瓦解が国家の生存競争という点を強調するためだけに用いられてはいいまいか。一九四〇年の時点では、限定戦争という「リベラルな戦争観」に基づく考えは不適切であつただけでなく、あまりにも危険であつた。

リデル・ハートは他人に迎合せず、勇気を奮って道義に適った言論をなそうとして、チャーチルが推進する総力戦体制を痛烈に批判したため、ますます不人気となつた。リデル・ハートが徴兵制を忌み嫌つたのは、それが第一次大戦での殺戮の主因であり、個人の自由を侵害すると見ていたからである。また、ドイツに対する戦略爆撃にも、効率の観点と道義的な理由の双方から反対した。すなわち、戦略爆撃は相手側の損害を大きくするだけで効果に乏しく、一般市民を巻き込み、さらには、お互いに憎悪を募らせ、ドイツの報復を招く結果となるというのである。重要であり、筆者に言わせれば大きな過ちでもあつたことには、リデル・ハートは一九四三年一月に連合国が合意し、日本に対しては不完全であつたが、ドイツでは完全に実行された「無条件降伏」の方針に反対した。今から思えば間違つていたのであるが、連合国が「無条件降伏」の方針に縛られて、ヒトラー後のドイツと交渉による和解を経てヨーロッパでの戦争を終わらせるということができなくなるのではないかとリデル・ハートは懸念したのである。また、連合国間の結束を強め、一九一八年とは逆にドイツは負けていないという装いをまとわせないだけの効果が「無条件降伏」にあると認めたくもなかつた。実際にはリデル・ハートの心

配をよそに、連合国は「無条件降伏」の方針に沿つてドイツを占領し、少なくとも西欧では自由な民主主義国の創造を促すことができたのである。ガットは充分に説明しきれていないが、リデル・ハートがドイツが自ら勝利の見込みを失った時に誕生するであろうヒトラー後の政権と交渉する可能性をあくまで信じていたというのは何ともお粗末である。リデル・ハートは連合国が総力戦を遂行し、無条件降伏に固執した理由がナチスのユダヤ人絶滅計画であつたということが、戦後、明らかになつてからも、ナチスの残虐性に関する自分の考えが間違つていたと公に認めなかつたというのが筆者の認識である。

戦争中、まだ連合国側の最終的な勝利が確証できなかつた当時、リデル・ハートが総力戦遂行に反対したり、国内での自由の抑圧を危惧したりしても、所詮、意味のないことであつた。しかし、一九四二年後半以降、枢軸国側の敗色が濃厚になるにつれて、リデル・ハートの主張は徐々に真つ当、かつ、愛国的と考えられるようになり、場合によつては正論とさえ思われるようになつた。例えば、ドイツが完全に崩壊してしまつたら、東・中欧に力の真空が生まれるといち早く指摘したのはリデル・ハートであった。その真空をソ連が埋めるような事態になれば、西欧にとつて新たな脅威となるのは確実である。また、世論がこうした見方を受け入れるようになるかなり以前から、ドイツを（あらゆる分野で）再興してソ連に対する防波堤としなければならないのに、爆撃によつてドイツをメタメタにしてしまつては西欧にとつてのちのち不利な結果を招くことになると論じたのもリデル・ハートであつた。厭戦感がはびこ

り始めるに、総力戦遂行の愚かさを指摘し、総力戦の必然的結果である国家財政の破綻に警鐘を発するリデル・ハートを支持する人が一般にも増えてきた。そして、リデル・ハートは一九四六年に刊行した『戦争革命』(The Revolution in Warfare)と題する薄手の概説書の中で、この百年というものの戦争が確実に残酷の度を増している点をズバリ指摘し、わざかに、文明が進歩した社会に見られるリベラルな価値観を取り戻すことによつてのみ、抑制、妥協、理性、すなわち侵略の意図を秘めた国家を封じ込める道が拓かれるであろうと述べている。

二十世紀二度目の総力戦が終結し、原子爆弾の登場を皮切りに新しい時代が幕を開けるや、リデル・ハートは胸を張つて、自分は決して間違つていなかつたと言えるようになった。第二次大戦はあまりにも大きな物理的破壊と人命の損失を招き、焼け出された何百万もの人々はほかに住む場所を探さなければならなくなつた。さらに悪いことに、ある形態の戦争が終わつた途端、冷戦という新たな形態の戦争が始まつた。まさに、リデル・ハートが言つたとおりになつたのである。

リデル・ハートは早い時期から、のちに核兵器と呼ばれるようになる原子爆弾がもたらす影響をかなり正確に予測していた。今では当たり前のことになつてゐるが、一九四〇年代後半、リデル・ハートが原爆は單に爆弾として強力なだけではなく、従来の戦略的発想を覆すほどの革命的な兵器であると最初に言つた時、これを理解する者はいなかつた。また、リデル・ハートは原爆が使用されるかどうかが議論されている時に、原爆は原爆保有国を攻撃するためには用いられないと断言したが、これ

も正しかつた。リデル・ハートは戦術核兵器についても否定的で、戦術核は同じようなレベルの兵器が使われないようにするだけで、戦術核に対する効果的な防御方法は得られないし、通常兵器による戦争やゲリラ戦の抑止にも役立たないうえに、大国は核のエスカレーションを恐れて介入を控えるので、核の傘のもとでもそうした紛争が頻発すると予見していた。数々の新兵器が登場したことによって、リデル・ハートが正面から取り組んでいる問題、すなわち、戦争の幅が広がつたことを考慮に入れつつ、いかに戦争を限定的なものに抑えるかという問題は本質的な部分において不变であったものの、重要度は増した。

彼がこのふたつの要素からなる目標を実現するための手段も、以前と変わらなかつた。核兵器の質的軍縮と軍備管理、抑止、相互抑制と集団安全保障、帝国の戦略的予備軍としての機能を果たす空軍のみならず、機動性と配備計画に基づいて完全に機械化された小規模な部隊によつて運搬され得る核兵器以外の通常兵器、間接アプローチ、「偽装戦争」、周辺戦争、潜入、転覆、そしてゲリラと非暴力的手段などである。

リデル・ハートの対ソ観はジョージ・ケナンのものと酷似しており、ソ連指導層は勇ましいことを口にしながらも、国は戦争で疲弊しており、

自国の安全とアメリカとの力の微妙なバランスを保つことばかり気にしているというのである。一九四九年のソ連の原爆実験成功は、いかなる

核戦争も考えられないというリデル・ハートの確信を強める結果となつたにすぎない。西側に残された唯一の合理的な選択肢は、非核戦争と限定戦争であつた。また、リデル・ハートは徴兵制に関しても、これまでにも増して強い疑問を投げかけ、徴兵によつて兵を集めていたのでは動員までに時間がかかり、ソ連軍が西欧に侵攻してきた時に、それを食い止められないとした。必要なのは、職業軍人が構成する完全に機械化された約二十個師団の精銳打撃部隊であり、これを複数の空挺師団が補完し、空軍も強力に支援すべきとした。目標は勝利ではなく封じ込めに置くというのがリデル・ハートの論であつた。幸いにも、ソ連軍の攻撃によつてNATO軍が試練に立たされることはなかつたし、東西両陣営の対立が招來した一連の危機の最中も、戦争に至らないよう配慮がなされた。核兵器と通常兵器との関係についての議論が複雑な研究対象になるとくると、リデル・ハート個人の姿は、ランド研究所のようなアメリカのシンク・タンクの前に、なりを潜めるかたちとなつた。もともとリデル・ハートは段階的抑止やゲームの理論といった抽象的な議論に关心があるわけではなかつたので、一九六〇年以降、回顧録の執筆と大著『第二次世界大戦史』の完成に没頭するようになる。

最後に、リデル・ハートとそのリベラルな戦争觀について若干の批判を試みたい。

対象をある程度離れたところから見る稳健で哲学的とも言えるリデル・ハートの姿勢は、第一次大戦で直接得た戦闘経験に絶えず影響され続けた神経質で感情的な人間という側面を覆い隠していた。とくに、体つき

がガッシリしておらず、軍人タイプとはほど遠かつたことはリデル・ハートの悩みの種であった。また、空爆恐怖症でもあった。こうしたことから、戦闘を物理的な現象という観点から論じるのではなく、むしろ、精神面や道義に適つた勇気といった側面を強調するようになつたのではなかろうか。

ガットも認めているとおり、リデル・ハートは本質的に論争好きで、公平さや歴史的客觀性を努めて保とうとはしていなかつた。ジャーナリストには受けが良くとも、研究者の間で評価が低いのは、そこに原因がある。

また、私的な情熱や執着が公の問題に対する態度を左右したこともある。例えば、一九三〇年代、イギリスがフランスへ派遣軍を送る問題が生じた際、リデル・ハートは軍事的、政治的観点から何度もそれなりにすばらしい反対論を唱えたが、それは第一次大戦の経験を二度と味わいたくないという気持ちが根底にあつたからなのである。

クラウゼビツツは一八〇六年のプロシアの敗戦を機に、戦争に対する自らの考えを書き記そうという思いにかられ、また同時に彼は愛国心に富み、昇進にも意欲的であったわけであるが、戦争の本質を解明するという、一部で単調で退屈と言われる作業に精力的に取り組んだ。一方、リデル・ハートのリベラルな戦争観はまず何と言つてもイギリスの利益を念頭に置いていた。したがつて、例えば、海軍力と經濟封鎖を最優先するリデル・ハートの考えが諸外国、とりわけ大陸ヨーロッパ諸国に適応できるかどうかはまったく不明である。皮肉にも、第二次大戦で、リデ

ル・ハートの唱える「イギリス式戦争法」はあまり意味のないことが明らかになつた。ノルウェーやギリシャで実施されたようなタイプの小規模上陸作戦がドイツのような陸軍强国相手に有効でないと認めざるを得なかつたのである。

そもそも戦争とは個人の意志など平氣で無視する残酷な行為であるから、リベラルな戦争観という表現 자체、矛盾していると思われても仕方がない。国際的な諸問題の中に戦争をどう位置づけるかという時に、リデル・ハートは平和主義者でもなく、また、戦争を国家戦略の手段として意図的に用いるのを正当化するクラウゼビツツの路線を踏襲する気にもなれなかつたので、リベラルな戦争観を提示したのであるとガットは言いたかったのであるまいか。

伝統的な自由主義の立場からすると、戦争は国家間の交易や眞に人間的な交流を妨害する異常事態と言える。勝利したからといって、特段、意味や価値があるわけでもない。侵略の意図を秘めた国を封じ込めたり、その意志をくじいたりして、交渉の席に着かせ、妥協的平和を確立する方向を目指した方が賢明であろう。こうした方法は痛みが少なく、二十世紀前半のイギリスのように現状に満足していた世界帝国にとって都合が良い。また、それはリデル・ハートが理性と中庸の働いた十八世紀の限定戦争を理想に近いとしていたことを想起させる。「リベラルな戦争観」はいかなる犠牲を強いられても総力戦の回避を最優先目標とする穩健、かつ、責任感のある國家指導者がつねに存在することを前提としている。イギリス本国と植民地の利益がともにドイツの脅威にさらされて

いると認識された一九一四年の時点では、リベラルで（概して）戦争を好まない指導者たちが平和にしがみつこうとしたところで、それが無理なのはわかりきっていた。ましてや、一九三〇年代に枢軸国側が与えた明白な脅威にリベラルな手段で対処するのは、とうてい不可能であった。イギリスは第一次大戦の時には大陸における利益を守らねばならなかつたし、第二次大戦の時にはまさに存亡の危機にさらされていた。リデル・ハートはこうした事実を容易に受け入れられなかつただけでなく、両大戦に勝利することの価値も、国民の自由を制限したり、敵を卑しめ、有権者を欺くような宣伝工作を行つたりしてまで将来に禍根を残さないようすることの重要性も理解できなかつたのである。

とは言え、否定的な面ばかりを並べ立てて終わりにするのは好ましくなかろう。死後三十年が経過した今日、欧米や「欧米型」自由民主主義諸国の戦争と軍隊に対する姿勢を大旨、特徴づけているのは、リデル・ハートの戦争観であるとするガットの結論を全面的に支持したい。個人の自由には国家に対する忠誠より、はるかに高い価値が付与されている。軍隊を効率的に運用することを考えれば、徴兵制が不人気、高価、かつ、面倒なものでは当然であろう。さらに、冷戦の終結は徴兵制を継続する根拠を失わせた。爾来、ヨーロッパのほぼすべての国で徴兵制が段階的に廃止される方向へ向かっている。リデル・ハートが思い描いたような、高度な訓練が施され、装備の充実した職業軍人からなる小規模な軍隊の実現が近づいている。また、リデル・ハートは死傷者なき戦闘といふまるで夢のような話もしていた。欧米、なかなかアメリカが自

軍から戦死者が出るのをひじょうに嫌がつてゐる。イラク軍に対する陸空統合作戦やハイテク兵器を用いたユーゴ空爆などを見るにつけ、死傷者なき戦闘が現実となる日も近いかもしれない。もちろん、これはあくまでアメリカとその同盟国の側にとつて満足のいく自由民主的な解決方法である。実際、イラクでもユーゴでも死傷者の数は多かつたし、建物などの破壊も大規模であつた。さらに言えば、こうした一方が圧倒的に優勢であるような紛争が規範となるかどうか疑わしいし、さまざまな要素が混在する政治問題を解決するうえで有効なのかどうかもはつきりしていない。本稿を終えるにあたり、筆者を頷かせたガットの言葉を引用しておこう。この部分は、一九三〇年代、四〇年代という極めて不透明な状況下でリデル・ハートが提起した「リベラルな戦争観」が、今では、「欧米型自由民主主義世界」で主流となつてゐるという説を要約的に述べているところである。

その中核となる概念、すなわち封じ込め、冷戦、そして限定戦争という概念は、そうした国々において、戦争がもたらす現象全般を嫌悪する傾向が強くなつてゐることを反映していた。戦争は国内の価値感や慣行とますます相容れなくなつてゐた。天然資源、工業製品、金融、サービス、情報が地球の至るところで体系的に取り引きされるには、経済的な繁栄が基礎として不可欠であり、そうなると戦争はいつそう居場所を失い、価値を減じていった。権威というものが薄れ、社会的規制が緩和されると、負担を負うのがますます嫌になつた人々が社会や

経済に期待するものと戦争とは一段と疎離をきたすようになった。欧米諸国のエリートは現状では軍事力の行使に限界があるとの認識を強めており、戦争での勝利を政治的な得点に転化するのもむずかしいと考えている。同時に、相手の立場を理解し、考慮しようという気運も高まり、戦争や紛争を起さないよう感情を抑制することが、ますます求められるようになってしまっている。

(平成十一年十月二二日、第一研究部が担当して開催した研究会の講演原稿を翻訳したものである。)

◎筆者紹介◎ 一九三六年生まれ。ロンドン大学キングス・カレッジ講師（戦争研究）を経て、一九八六年から同教授（軍事史）。王立防衛問題研究所評議委員、イギリス軍事史学会会長等を歴任。*The Pursuit of Victory: From Napoleon to Saddam Hussein* (Oxford University Press, 1996)、*War and Society in Europe, 1870-1970* (Leicester University Press, 1984)などを著書、論文多数。